

鈴木三重吉の「団栗」評と『赤い鳥』及び円本全集

四宮義正

漱石の弟子で寺田の友人といえ、小宮豊隆（明治 17 年～昭和 41 年）が一番に思い浮かぶけれども、むしろ寺田の本質を早くから理解していたのは鈴木三重吉（明治 15 年～昭和 11 年）のような気がする。あるいは漱石以上の部分もあると思う。鈴木「団栗」の評、鈴木が関係した児童文芸誌『赤い鳥』及び円本全集について簡単に紹介する。

1. 鈴木「寺田評」

鈴木が寺田「団栗」などを評価した文章を二つ転記する。まず「私の事」（『新潮』第 16 卷 3 号、明治 45 年）を全集から引用する。

その時代に最も私を引き付けたものは、写生文派中の別派たる寺田寅彦氏の作物である。「ほととぎす」に載った「団栗」と題する文章であった。……

その時の私の考えでは、私が西洋の作に見るような結構というものが、所謂写生文の事実のように実在してはしない。どうしても空想で作り上げなければ深大な小説は出来得ない。その空想の結構を写生文の手法で写したならば、ここに初めて嘘らしからぬ大きなものが得られるのではないか。こんなことを考え、且つ主張していた。そうして「団栗」などは写生文から出て、写生文が大きな小説を得る一階梯に上ったものと考えた。或はそれは取材が（描写の手際とか、作を包む気分とかを除いて言うと）いいのかも知れんけれども、一々の経験にそんない纏った材料が得られるものでもない以上、どうしても空想で作り上げなければ、優れたものは出来ぬ。その空想で作り上げる技倆が即ち作家としての根本的の要素ではあるまいか。

「結構」は全体の組み立て、構造ということだろうが、後世の写生文解説者の言説でもこの三重吉くらい分かりやすいものは無いように思う。

次に「寺田さんの作篇」（『渋柿』寺田寅彦追悼号、昭和 11 年）から同様に引用する。

言うまでもなく、あの人〔寺田〕の随筆での最も目立つ牽引の一つは、その独自として特徴づけられている科学的頭脳の価である。一小品における単なる線香花火そのものや、文楽の印象記中の舞台の構造、舞台と語り手との位置関係やの観察そのものを読んでも、科学者たる氏の着目と追求とはわれわれにはとても意外であり、とうてい叶いっこはあり得ない。しかしそれも、ちっとも専門家的な臭味や威圧があるでなく、ただ普通われわれなみの通俗な態度ですらすらとやっているまでなので、何等のきざもない。ただ、愉快に頭が下るだけである。なお氏の触れるそれらの問題は根本の出立において、すべて、ことごとく、われわれの日常見る平凡な現実の中の普通の事象のみである。……

私は二十三年の年に、氏が二十七でかいた処女作の『団栗』を読んで、とても引きつけられた。私の、二十四での最初の創作の刺戟は、最も近接的には、『団栗』から得たと言ってよい。それ以来、寺田さんは、いつまでたっても、終に最後まで『団栗』の中の寺田さんのように思われていた。しかし結局、これは、私のハルシネーション（幻覚）だけのものとは言えないようである。どこまでも、貴く、なつかしき寺田さんよ。……

俗世間が氏の作家としての価に無知であった好例としてはいつかの円本の時、或社のプログラムには寺田さんのものはいっていなかった。長塚節のもなかった。ひどいのはだれでも加える筈の高浜さん（虚子）のものもはいていなかった。私はその社主に対して鋭く非難した。ついで、その円本に模倣的に対抗した他の円本へは私の或権利をもって、最初から今言った三氏のものを加えることを提案し、実行せしめた。なほ、解説もその社の手近には三氏の作に対しては私ほどの理解も尊敬もないと考えたので、私から買って出て、解説を書いた。それをほかにして、私が本屋にやとわれて人の本の解説などを書くいわれはない。

この後、寺田寅彦の作品が『中央公論』にたくさん掲載されているが、その相ついでに二代編集者が鈴木はらの社にいて、寺田さんを尊敬することを疾くから知っていたためである、としている。また鈴木がプランの指唆をしたと書いている。

2. 児童文芸誌『赤い鳥』

『赤い鳥事典』（2018年、柏書房）に「寅彦と鈴木三重吉は、作品を通じて、お互いを認め合う関係であった。」とある。寅彦は三重吉の処女作『千鳥』を激賞した。「寺田寅彦が千鳥をほめて好男子万歳と書いて来た。」（漱石から三重吉宛ハガキ、明治39年5月3日）というようなこともあった。

鈴木は1918（大正7）年7月に月刊児童雑誌『赤い鳥』を創刊しているが、いつも寺田家族のことを気にかけていた。寅彦から三重吉宛の書簡をみると、つねづね『赤い鳥』をはじめ、三重吉著『古事記物語』や童謡集など子供向けの本を贈ってもらっていたことが分かる。

大正8年12月5日、胃潰瘍で吐血し、大正9年から大正10年のほとんどを自宅で療養していたが、たびたび三重吉から見舞い状があったようで、その返事の手紙がある。長患いによる不安な気持ちが表われている内容である。

大正9年10月22日（金）

御手紙難有う御坐いました。いよいよ御帰京の由、御病気はもうすっかりいいのですか、小生の病気は不相変不得要領で牛の涎よだめのように「継続中」であります。赤い鳥をたえず頂戴して難有う御坐います、みんなで来るのを待ちかねて居るようです。此間は第三童謡集難有う、大変気持のいい絵だと思えます。

「行ったり来たり、昨日も今日も」という唱歌を子供等が歌って居るのを聞いて居ると此のおやじの方が妙にセンチメンタルになります」西条さんという人は年の行かない時に母を亡った人ですか」僕は暇ですからいつでも御立寄を願います。工合の悪い日は寝ころんで御話しなればならないかも知れませんが其無礼を御許し下さらば僕の方はいつでも結構です。

大正10年2月3日（木）

謹啓 西条氏の童謡集御恵与被下一同大喜、かえすがえす御礼申上候、此のおやじ自身も面白く拝見しました。「蹠」や「山の母」や「行ったり来たり昨日も今日も」というのは、子供等が唱って居るのを聞いて居るとおやじの方が妙にセンチメンタルになって来る、子供の方はそうでもないらしい、著者のこういう素質には何処か私とコンジェニアルな処があるような気がする。

右御礼迄、御自愛を祈ります、今年は病気は大丈夫ですか。

[注] congenial : 気が合う。

引用されている「行ったり来たり…」は西条八十（明治 25 年～昭和 45 年）の童謡「春の日」である。「赤い鳥」童謡 第三集（大正 9 年、赤い鳥社）に掲載されている。

別のページには見開きで成田為三作曲の楽譜があるので、子供はそれを見て歌ったのだろう。寅彦が褒めている装画は矢部季の作で赤い色が目立つ。

春の日

行ったり、来たり、 昨日も今日も 山の上を 白い雲が。
行ったり来たり、 昔のまゝの お室の時計 錆びた振子。
行ったり来たり、 窓の下は 花の祭 馬車と人とが。
行ったり、来たり、 春の日かげの 母亡き室を 小さい風が。

[注] 原文では改行しているが、スペースの関係でしていない。

「西条氏の童謡集」は、赤い鳥の本第三冊『鸚鵡と時計』（大正 10 年、赤い鳥社）であり、寅彦が言及している三つの童謡も収められている。楽譜は付いていない。奥付からみて、刷り上がってすぐに届けたのだろう。巻頭に「鈴木三重吉氏に献ず」とある。「序」に、はじめて訪ねてきた三重吉から『赤い鳥』のために童謡を書くように勧められ、「薔薇」を書いて「真の詩の精神」へ復帰することができたので、三重吉が恩人だとある。父が極端に質素儉約を重んじ美的趣味を斥けた人で、母も似たような女性であった。そのため「山の母」のように、生みの母のほかにも、真実の母が遠くに隠れて在ることを疑っていた、とある。寅彦の直感はある意味当たっていたのである。

『赤い鳥』といえば、八條年也の筆名で第 8 巻 5 号（大正 11 年 5 月）に掲載された「茶碗の湯」のことがよく知られているが、それよりも前に寺田雪子（6 歳）の絵（人物画）が『赤い鳥』（第 5 巻 2 号、大正 9 年 8 月）に掲載されたこともあった。

「茶碗の湯」については『科学絵本 茶わんの湯』（2019 年、窮理舎）に詳しいのでここでは触れない。

2. 円本に収載された寺田の作品

円本とは、1926（大正 15）年末から改造社が刊行を始めた『現代日本文学全集』を口火に、各出版社から続々と出版された、一冊 1 円の全集類の俗称あるいは総称である。庶民の読書欲にこたえ、日本の出版能力を整え、また、執筆者たちをうるおしたそうである。

寺田作品の収載の最初は、鈴木が書いているように春陽堂『明治大正文学全集』（全 60 巻（*1））の第 21 巻、長塚節・高浜虚子・吉村冬彦篇（昭和 3 年）である。ページ割りをみると、長塚 272p、高浜 328p、寺田 70p である。他の二人に比べると量は少ないが、最初の円本全集収録であるから喜びも一入であろう。鈴木は春陽堂から多くの著作を出しているし発言力があって尽力したのだろう。のちのち印税の取り立てでも鈴木の世話になっている。

内容は既に出ていた『藪柑子集』（大正 12 年、岩波書店）から「先生への通信」を外したものである。鈴木は巻末に「小解」を書いているので引用する。



「春の日」楽譜の最初

同氏〔寺田〕の作は、もともと氏の動きが職業的でなかっただけに、一つとして表面、文壇の批評に上がったことがない。吉村冬彦という仮名は、氏が比較的最近に用い出したもので、この名は多少今の読者の間に畏愛されているけれど、早い、作家としての寅彦、藪柑子の名まえに牽引されたことのある人は稀であろう。氏の以上の形としてはすべて小さき名篇が、世間的にはほとんど見かえられずに隠れていたことは、今からいえば却って、その作篇の幽谷の花のごとき清高さにそぐわしい感じさえする。各篇とも、いはば根底には、憂鬱な哀愁をたたえながら、しかも表面は、そのために曇ることなき理性の白金光によっていぶされた、独自の抒情詩篇である。その多くが日本人の因襲の臭味が寸分もない意味において、さも、はじめて西洋の作品を読みでもするとき清鮮な芳香を味わい得る点も、氏の一つの特異でなければならない。

寺田は鈴木宛の書簡で喜びを伝えている。

昭和 3 年 6 月 9 日（土）

扱て右年月を調べて見ると此れは少生二十八歳から三十一歳迄に書いたもので、今年が五十一歳だからみんな二十年以上の昔紅顔でない迄も赤銅色の若者であった頃の若気のいたずらの記念のようなものですが、年とって厚顔あつなましくなったせいかわりにきまりが悪いという程でもなく寧ろ余程昔に死んだ兄弟かなんかの遺著でも見るような心持で見る事が出来そうであります。

「小解」を読んだ感想も知らせている。

昭和 3 年 7 月 20 日（金）

解説早速拝読 一人で鼻を高くしましたが椎蕈しいたけではなくて空也餅くうやもちのひっかけり場所の一節に到って少々しょげました、兎も角もおかげをもって明治大正文学史の中へささやかながら影を残す事の出来た事を感謝致します。どうも難有う。

其内印税をとったら一度おごる事を許して頂度いと存じます。

一方、改造社は、『現代日本文学全集』と銘打っている。当初全 36 巻だった（*2）。この時、寺田は入っていなかった。やがて全 63 巻に拡大されて、第 58 巻（昭和 6 年）に寺田の作品が収載されている。この巻は新村出・柳田國男・齋藤茂吉との合集になっている。

収載は既に出ていた『冬彦集』（大正 12 年、岩波書店）から約半分の 15 作品、105 ページ分が選ばれていて、年譜が付いている。

改造社と春陽堂という代表的出版社の円本に収載されたことで、時代の文学者と認定されたのである。『冬彦集』以後の作品についての鈴木理解と評価は「寺田さんの作篇」に書かれている通りであり、早い時期から寺田の本質を理解していたことがよく分かる。

鈴木は昭和 11 年 6 月に寺田を追いかけるように亡くなっている。高知新聞 2018（平成 30）年 5 月 17 日付によると、鈴木から寺田雪子宛の書簡（昭和 11 年 1 月 21 日付）が高知県立文学館に寄贈されている。内容は前年の寅彦逝去についてのお悔みで、自分は病床に伏していたので葬儀に行けなかった、代人を出すより病気が治ってからお参りする方が良いと思った、というようなことが書かれている。

このように、鈴木は家族を含めた寺田家を大切にしていたのである。

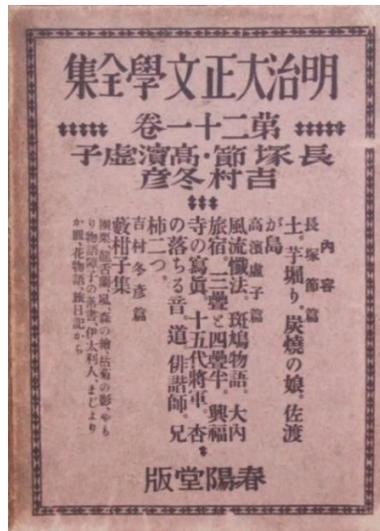
(注) 引用文は漢字、仮名遣いを変更したところがある。

(*1) 全巻について箱表紙の電子復刻がある。

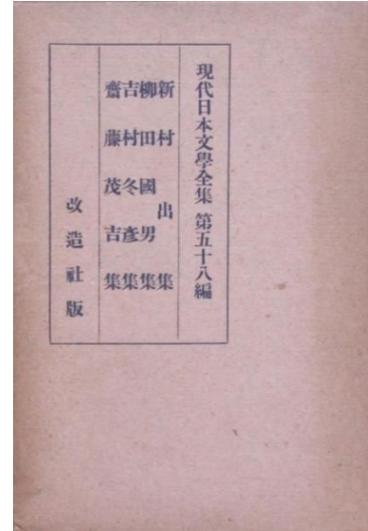
(*2) 東京朝日新聞大正 15 年 10 月 16 日、第 6 面の広告による。小尾俊人『本が生まれるまで』(1994 年、築地書館) 220 頁にこの広告が掲載されている。



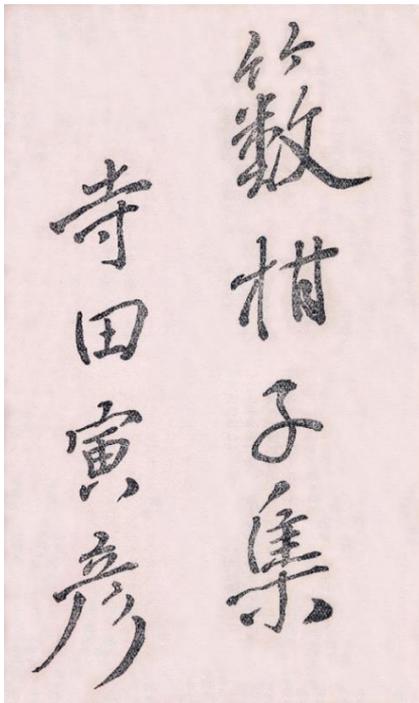
西條八十『鸚鵡と時計』
表紙 (大正 10 年、赤い鳥社)



『明治大正文学全集』
第 21 卷の箱 (春陽堂)
(昭和 3 年)



『現代日本文学全集』
第 58 卷の箱 (改造社)
(昭和 6 年)



春陽堂全集の自筆署名
(簾：竹冠に注意)

私には書く事即考へる事である
頭の中で考へた事を紙へ書きならべて
見るとつじつまの合はぬ点や穴の明いた
箇所がよく見えて来る それを直して
居るうちに又次の考が呼び出されて来る
吉村冬彦

私には書く事即考へる事である
頭の中で考へた事を紙へ書きならべて
見るとつじつまの合はぬ点や穴の明いた
箇所がよく見えて来る それを直して
居るうちに又次の考が呼び出されて来る
吉村冬彦

改造社全集の自筆序詞